
AVENGER

GENESIC

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

AVENGER

【Nコード】

N4516F

【作者名】

GENESIC

【あらすじ】

真樹宗佑。彼は中学生。だった、あの事件から彼は変わってしまった。復讐者に

第1話 【復讐者】

第1話 【復讐者】

2020年4月。

神奈川県。

ここに一人の男がいた。

「復讐してやる……やつらに……」

その少年は妙に暗い顔で言った。

まさかき そうすけ
真樹宗佑それが彼の名前だ。

彼の生活はある出来事で崩れた。

それは両親の殺害であった。

悪徳金融（通称・FV）に大量の借金をし、殺されてしまったのだ。

当時、東京へ行っていた彼だけが、殺されなかったのだ。

そして宗佑は復讐を誓ったのだった。

春。

じんだい
神奈川県立神代中学校。

俺はここに通っている。

「そーちゃん！どうしたの？そんなくらい顔をして？」

「なんでもない。いいから俺にかまうな……」

あさくら れな
こいつは朝倉伶奈俺のアパートの隣にすんでいる女だ。

「いいじゃない！幼馴染なんだから。」

「……」

伶奈は俺が復讐者だとしていた……なぜか

「ねえ復讐なんてやめたら？後には何ものこらないよ？」

「……」

そういうと伶奈は俺の前に立ちとまった。

「ねえ聞ってるの???」

「お前にはわからないだろうな。」

そういつて俺は校舎に入った。

学校には行くが、当然の如く授業は受けない。

『俺は・・・ほんとに復讐できるのか?』

屋上に来るといつ考える。

「・・・・・・・・」

放課後。

チャイムがなり俺は下校する。

「そーちゃん!一緒に帰ろ!」

『またこいつか・・・・』などと思いながら言う。

「却下」

あたり前だ。

でもなぜかついてくる。

おせっかいな女だ。

そしてアパートの近くについた。

薄暗い路地。

時刻は7時

もうあたりは真っ暗だ。

俺はなんだか嫌だった。

「そーちゃんどうしたの?」

その瞬間、後ろからベンツが突っ込んできた。

「逃げろ!!!! 伶奈!!!!」

伶奈を家に帰した俺は、ベンツに乗っていた男に話しかけた

「貴様・・・なにさまの・・・・!」

そいつはFVの幹部の男だった。

「お前が真樹宗佑か。社長の命令だからな。」

そういうと男は車から日本刀を持ってきた・・・・

第2話 【FVの男】

男の日本刀が月光で輝いていた。

俺は肩まである髪を後ろで束ね言った。

「貴様らの狙いはなんだ」

「・・・・・・」

男は答えず、刀を構えた。

俺は近くの建設中の家から鉄パイプを持ち出し、構えた。

沈黙が下りる・・・・

男は切りかかってきた。

俺は刀を避け、90度回転しながら鉄パイプで男の顔めがけて殴りかかる。

男は、それをいとも簡単に避け、一步退がる。
数秒間が空いた。

もう一度、男が切りかかってくる。

俺はそれを避け、地についた刀を右足で踏む。

「もらった!!」

俺はパイプで男の顔を殴ろうとした。

だが男は俺より速く腹に蹴りを入れていた。

俺は吹っ飛ばされた。

間一髪で受身を取り、立ち上がった。

ペッ

口の中に滲んだ血を吐き出した。

男は、刀をこっちに向けた。

「ほう。やるな」

そういうと男は、刀を構え方を変えた。

『何か・・・来るな・・・・』

俺はそう考えた。

刹那

男はさっきの数倍のスピードで切りかかってきた。

「！！！」

俺は間一髪それを避けた。

だが俺の前髪がヒラッと舞った。

まずいな……

俺は、男と一旦距離を置いた。

数秒だ経った。

俺は男と間合いをあげながら、相手を見つめジリジリと回った。

どうするかなあ……

そう考えたら男の後ろに建設中の木材が束になって今にも落ちてき

そうなことに気づいた。

あのロープを切れば……

そう考えていると、男がさっきのスピードで切りかかってきた。

そのスピードになれていた俺は、それを避け前転して木材の束の前

まで行った。

男は切りかかった体勢のまま、立ち上がると同時に一文字に切りか

かってきた。

俺はそれをしゃがんで避けた。

スパッ

っと言う音とともにロープが切れ、男に大量の木材が降りかかる。

「！？」

男は木材の下敷きになった。

終わった……

俺は男が死んでいることを確かめるために、木材の近くまで行った。

2、3度木材を蹴飛ばした。

この様子じゃ男は生きていないと悟った。

シュ！！

次の瞬間、俺の右目の少し右のあたりから瞼の上の方までがスッパ
リ切れていた。

！？

俺は痛みで退いた。

俺は一瞬何が起きたかわからなかったけど、すぐに状況が理解できた。

生きてたのか……

俺の右目は傷口から出てきた血でそまり、とてもあけれる状態ではなかった。

この痛み……けっこう深いな……

独眼でやつと戦えるのか？

そう思いながら、木材の方に目をやった。

ガラガラと言う音とともに男が起き上がった。

男は俺の方を向くと残念だったなっという顔でニカツと笑った。

俺は男から距離をとった。

こりゃ……マジでやばいな……

俺はどうするか考えた。

腹は括ったぜ。

そして俺は構えた。

逃げるのはしょうに合わねえ

男も刀を構えた。

そしてまた切りかかってきた。

俺は何度か男の刀を避けた。

だがやはり独眼の影響と大きく反撃することは困難だった。

そういう状況が何度か続いた。

はぁ……はぁ……はぁ……

息が切れてきた。

こりゃ……切られるより先に出血多量で死ぬかもな……

っと思った瞬間男が切りかかってきた。

しまった……右目の死角に……

ザクッ

俺はそれを右の手のひらで受け止めた。

そして刀を強く握った。

その刀を手間に引き

「これしきのことです……」

引っ張られた男の腹におもいきり蹴りを入れながら叫んだ。

「やられるかよ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

男は血のついた刀ごと吹っ飛んだ。

右手が使用不能になった。

これくらいのことでは男がやられるのではなく切りかかってきた。

だが男の太刀筋は以前よりも甘くなった。

こいつ・・・自分の腕に相当自身があつたな・・・蹴り食らつていらだっている。

機械みたいなやつだと思っていたけどそうでもないな。

そして男は大きく振りかぶり縦に切ってきた。

俺はその見事な太刀筋を紙一重でかわし、そして右足で刀を踏んだ。そして俺は左脚を大きく天にあげた。

月光で左足が光る。

男は攻撃されると思い防御に入った。

俺は天高くまであげた左足を男の刀に振り下ろした。

「チエエエエエエエエエエス トオオオオオオオオオオオオオオオオ
オオオオ」

パキーン！！！！

男の刀は俺の左足の下で真っ二つに割れた。

男は驚きと動揺で隙を見せた。

俺は右足を折れた刀から下ろし、左足を軸にして360度回転しながら男の顔に体重を乗せた右足のかかとをぶつけた。

男はもうひとつの折れた刀とともに吹っ飛んだ。

俺は少しにやけた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4516f/>

AVENGER

2010年10月13日11時22分発行